

2010年モスクワ滞在の報告2 カレリアの若手作家：イリーナ・ママエヴァ

スラブ研究センターGCOE共同研究員 前田しほ

イリーナ・ママエヴァはペトロザヴォーツク在住の若手作家である。1978年ペトロザヴォーツク生まれ、ペトロザヴォーツク国立大学農学部を卒業後、職を転々としながら、小説家をめざし、2005年中編小説『レンカの結婚式』（「諸民族の友好」誌、2005年、第6号）でデビューした。2006年中編小説『ガイの大地』（初出「諸民族の友好」誌、2006年、第1号）とともに単行本化された。¹ カレリア地方オネガ湖畔の小村を舞台に、素朴な若者たちの人間模様と恋を描き、複数の受賞の栄光に輝いている。地方都市を舞台にした『悪魔の顔をして』（「諸民族の友好」誌、2007年、第12号）では、20代後半の独身女性の年下の恋人との葛藤と孤独を描いた作品である。² 早婚の傾向が強いロシアでは、30歳近くで結婚経験がないのは、日本以上に「行き遅れ」の危機感に迫られるのだ。村であろうと、町であろうと、ママエヴァの描くロシア娘は、現代の若い日本女性とさして変わらないように思える。

写真1：カレリア共和国の首都ペトロザヴォーツクの古い町並み。かつてはこのような木造建築が立ち並んでいたという。



写真2：ママエヴァ(左)と筆者(右)。2010年5月13日、ペトロザヴォーツク大学にて。

¹ *Мамаева.И. Земля Гай. М.,«Вагриус», 2006.*

² *Та же. С дебильным лицом. М., «АСТ», 2009.*

先日、ママエヴァの母方の出身地である、オネガ湖畔のポドモゼロ村への招待を受けた。ペトロザヴォーツクからバスで5時間、あまりに遠いためダーチャ村として開発されることなく、昔ながらのペーチや飾り枠のついた丸太小屋が、廃屋も交えて、たたずむ小さな村である。『レンカの結婚式』はこの村をモデルに描かれたという。カレリアは「千の湖の国」と呼ばれるように、ラドガ湖、オネガ湖をはじめ、無数の湖沼が点在する。特有の小ぶりの白樺と松の美しい森が、延々と続く。産業といえば林業とその加工業くらいで、空気も水も清らかな地方である。もっとも有名なのが、オネガ湖に浮かぶ世界遺産キジー島であろう。もうひとつ、希少鉱物シュンガイトの産地としても知られるが、ポドモゼロ村は発見地であるシュンガ村に程近い。地表に出た鉱脈を横切る道にはシュンガイトが落ちている。とはいえ、日本ではカレリアとって、具体的なイメージは沸かない。そこでモデルとなったポドモゼロ村の写真を交えて『レンカの結婚式』を紹介しようと思う。この小説は次のように始まる。



ポドモゼロ村から望むオネガ湖。湖のあちこちにこうした半農半漁の村が広がる。

レンカが恋をした。私はレンカが恋をしたと思う。ほかに言いようがあるか？この次第はこう。村の、以前教会だったところは、もうだいぶ前から図書館と農業クラブになっていた。そこでは土日にディスコが開かれた。カーチャおばさんにクラブの鍵を借りて、ロムチクは使い古された「シャープ」のカセットデッキを持ち込んでいた。若者たちが集まる。この村や、近隣の大きな村からも。ここ、クイテジ村には警官がいなかった。そもそも上級機関というものが存在したことがなかった。これも人を引きつけた（『レンカの結婚』「ガイの大地」所収、5頁。以下引用は全て本書から）。

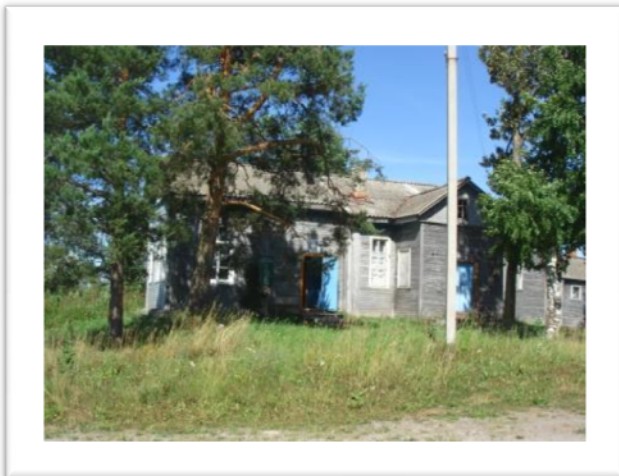


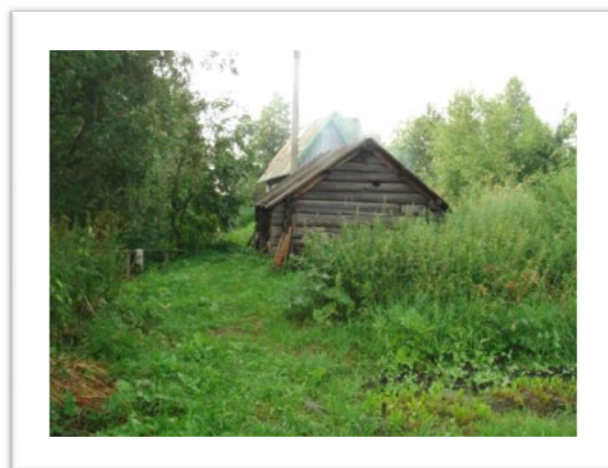
写真4：図書館兼クラブ。道をはさんで向かいに、村唯一の食料品店がある。ここがポドモゼロ村の中心地。木陰になって見えにくい、「大祖国戦争」（第二次世界大戦時の対独戦）の英霊の記念碑もちゃんとある。

『レンカの結婚』は、1990年代の農村の厳しい経済事情を背景に、素朴で無垢な少女レンカの初恋と、彼女の周囲の人間たちをユーモラスに描く。レンカは善良で、信仰に厚いが、あまり賢くなく、容姿にも恵まれない17歳の少女である。学校は6年生で中退、地元の農場に勤めている。村は見た目は美しいが、人口はどんどん流出し、廃屋だらけ。電気はきているが、上下水道は整備されていない。飲み水は井戸を汲み、皿や洗濯物は目の前を流れる小川で洗う。もちろんシャワーはなく、バーニャ(蒸し風呂)を焚いて小川に飛び込むか、川や湖に水浴びに出かけるのである。住人は教養はなく、若者はどんどん町にでていき、残った高齢者が死ねば、村は自然消滅する。幸い、この村には旧ソフホーズの農場がある。といっても仕事は、牛馬の世話、賃金はしばしば現物支給(牛乳や肉)という有様である。娯楽が少ないので、楽しみはテレビのシリーズ・ドラマと村のクラブのディスコ。呑むことで気を紛らわせる人も多いので、酔っ払いが目立つ。作家の持ち味のひとつは、こうした現代の村の風俗をよく書いていることだろう。これらの描写は、90年代後半の光景を念頭に置いたが、現在もほとんど変わらないという。ママエヴァのスタイルは、ソ連時代の農村派のノスタルジーとは無縁で、農村やそこに住む人々を決して美化しない。例えば、20歳そこそこの若者が田舎道をいきがってバイクで往復したり、得意げに女の子に声をかける様子は、さもありませんと目に浮かぶ。もっともこれは田舎出身の筆者に似たような記憶があるからかもしれない。田舎の小娘の目には、格好良く見えたものである。もっとも、ママエヴァ自身は、生まれも育ちもペトロザヴォーツクで、夏だけ訪れる典型的なダーチャっ子である。微笑ましいというには虚栄心が鼻につくし、見ようによっては滑稽な光景だったろう。しかし、ママエヴァはこれらを見下しもせず、美化もせず、村の風俗として、巧みに描出する。



写真5：皿洗いの光景。小川に沿って家が点在し、こうした洗い場がかしこに設けられている。カモの親子が餌をねだりに来たところ。

写真6：バーニャ。バーニャには、原始的なチョールナヤ(黒)と、煙突で煙を排出する快適なペーラヤ(白)の二種類がある。築100年以上のママエヴァの家では、同じくらい古いチョールナヤ・バーニャを維持していた。レンカが入るのはこれである。写真は焚きつけたばかりで、バーニャ全体から煙が吹き出している。煙突らしき物は通気口である。煙が収まるのを待って入浴するが、追い焚きができないのが難。通常のバーニャを焚くより、技術が必要なのである。



では、レンカの恋に的を絞って、あらすじを紹介しよう。

頃は夏、7月から8月にかけてのこと。村のディスコで、ある日見かけない若者を見掛け、一目惚れする。復員してきたユルカである。以来、ディスコのある日を首を長くして待つが、恥ずかしくて、ユルカに声をかけることもできず、遠くから見守るだけ。そんなある日知恵をつけられて、酔っ払いの父親に代わって馬の世話をするユルカを待ち伏せする。そこでユルカと何気ない会話を交わして、有頂天になる。またある日バイクを飛ばすユルカに誘われる。後部座席に座り、ユルカにしがみつクムーディにダンスし、ホールの隅で抱き合っキスをすることを恋人気分で見守るが、気がつけば（ディスコをすつとぼして）ユルカの自宅にあがっていた。次の日からレンカは病に伏せるが、それは身体というより心の病気である。思いがけず「すべて」を経験したのである。レンカは、傷つきながら、ユルカが花をもって見舞い来ることを期待する（が、来てはくれない）。

後日、勇気を出して彼に「私たち、あんなことがあったんだから、恋人よね？」と問いかけると、お前がついてきたから、望みのことをしてやっただけだ、楽しみにすぎない、あれくらいのことでお前に縛られるつもりはない、自分は若いのだから、まだ遊びたいし、結婚する気はない等々の暴言を吐かれる。それでも彼が大好きなレンカは、ユルカも同行するという村の若者たちのピクニックに加わる。ところが道中、雄牛に襲われ、ユルカが追い回される。レンカは彼を助けたい一心で、果敢に牛に立ち向かう。おかげでユルカは命拾いするが、今度はレンカが襲われ、救急搬送される。そしてエピローグ、9月の終わり、幸せ絶頂のカップルユルカとレンカの結婚式が執り行われる。



写真7：7月のカレリアは、ヤナギランが咲き乱れ、一面のピンク色である。奥にみえる廃屋は、シベリアに流刑されたクラークの家だという。ソ連時代は孤児院に転用されたが、現在は荒れ放題。



写真8：農場の牛の群れ。水浴びに行く途中、放牧されているところに遭遇。警戒心か、興味津々なのか、一斉によそ者に注目する牛たち。恐る恐る脇を通り抜ける。幸い牝牛だった。

プロット自体はよくある、というより型どおりである。しかし、ママエヴァの語り口がユーモラスで、愛情にあふれているため、純粹無垢な（というより、無防備極まりない）少女の恋の行く先に、思わず引き込まれる。特に、肝心の場面を書かず、読者を引き込んで、想像させることに長けているため、正直いって、その書かれていない部分が気になって仕方ない。例えば、レンカが犯されるシーン。造作なく自宅に連れ込まれ、彼のベッドに腰掛けるところで描写は終わる。次にレンカが登場するのは1章おいてのこと、しかも病気で寝込んでいる。もっとも、初心な少女が男のベッドに腰掛けるとすれば、今後の展開は容易に想像できる。

雄牛が狙いをユルカからレンカに定めるシーンにしても、突き飛ばされる瞬間は描かれない。「牛は急に方向を変え、レンカに突進した」。次の瞬間には、「救急車の中でレンカは准医師にしがみついて、彼女をお母さんと呼び、ねだるのだった『お母さん、お母さん！ 本当ね、わたしのウェディングドレスは真っ白よ。こんなに長くて、広いのよ、映画みたいに。』」こんなうわ言を口走って、准医師が「必ずそうなるから」となだめるので、思わずこの子は死んでしまうのか、よもや「レンカの結婚」は一生かなわぬ夢に終わるのかと心配になる。他方で、この准医師は、怪我人の頭が、穴だらけの道で車が揺れてごつごつぶつからないように、必死で支えているのだから、思わず笑ってしまう。

しかし（書かれてはいないが）ユルカも、レンカの真心に心を打たれたらしい。おそらく、今度は花束をもって見舞いに行かざるをえなかっただろう。周囲もうるさかっただろう。そして、どうやら彼も恋をしたらしい。前日の雨で、きれいに晴れ上がった小春日のある日、鳥が歌い、犬が駆け回る中、「レンカとユルカも、とても幸せで、喜びに満ちて、心配事なく、うわついていた。彼らにはなんでもできた。彼らは今日は何だってできた。だ

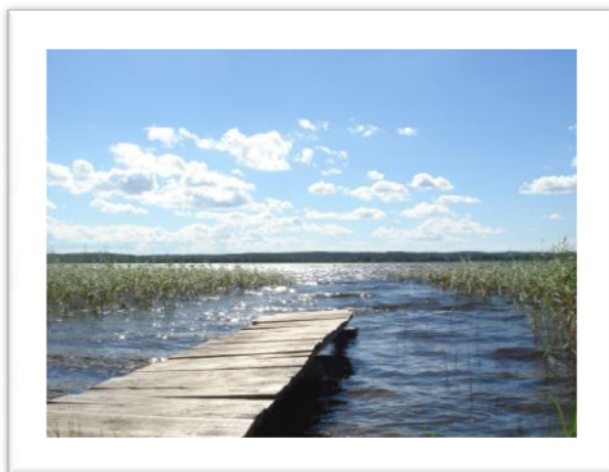


写真9：オネガ湖。レンカの結婚式もこんな日に行われたのだろう。

だってそれは、レンカの結婚式だったから」。めでたいことに、相思相愛で結婚式を挙げられたらしい。「うわついていた」という形容が、若いカップルの有頂天な様子をリアルに伝えるし、バラ色の結婚生活が待っているわけでないことを暗示しているようで気になるのだが（ロシアでは、あまりに早い結婚が、高い離婚率につながるのは周知の事実である）。

3

このように猥雑な村の世界で「無垢」なレンカが清らかな孤高の存在であるわけではない。レンカもまた猥雑な俗世界の一部であり、「無垢」ゆえの性的無知は、ときには滑稽な事態、ときには「取り返しのつかない」災難を招く。さらに、意図せず（もちろん作家は意図しているのだろう）、巧みに取り繕われている美しい身体の、美しくない、生々

しい実態を暴き出す。例えば、ユルカに恋をした1週間後のこと、恒例の土曜日のバーニャ（蒸し風呂）の後、なぜかその日はすっきりせず、自分の容姿を鏡に映して、不美人ぶりをなげいていると、親友のリュプカがディスコに誘いに来る。が、普段着のまま、明らかに外出の容易をしていないのを見て取る。

「なによ、行かないっているの？くそ、一週間ユルカの話で人をうんざりさせといて。本当に行かないの？絶対彼来るのに」「リュプ、私行けない...」レンカは彼女を迎えに出た。「ええ！なんで？」「私きれいじゃないから...」レンカはうちのベンチに腰掛けた。「私はきれいよ！」「アニカ・ミチキナはきれい」「しめちやいな！彼に会いたいの？会いたくないの？」「会いたい」「じゃあ、ひとつ走りして、川で手と足を洗っておいで。ちよいと、あんた、足の毛剃ってないんじゃない？」「それがなに」レンカは驚いた。「しなきゃだめ？」驚いて自分の足をじっと見た。「そりゃそうよ！しなきゃだめ！絶対しなきゃ。それに足だけじゃないよ」「どこ？」「あそこも」「あそこ？」レンカには分からなかった。「だから、あそこよ...」

もっと上...分かるでしょ」リュプカはレンカの肩を抱き寄せた。「本当の女性ってのは、身体に毛は生えてないもんなの。男に嫌われるよ。ああ、やだやだ、毛なんて！」「あそこなんて見ないよ」「もう、ばかだな...」リュプカは喚いた。「せめて、足を剃って」「私...」「口を閉じて！父さんのヒゲソリがあるでしょ。一本とってきて」ともだち思いのリュプカの指導の下、衝撃的な新モードで、レンカは足の毛を剃った。「本当、これならいける。ねえ、キャンディほしくない？母さんがいっぱい仕入れてきたんだ」リュプカはすっかりいい機嫌だった。

(46-47頁)

こうして言語化されると（しかも庶民的な、俗語も交えた話し言葉として）、いささかショッキングな会話であるが、共感する日本女性も多のではないか。体毛の処理とは、我が国でも女性の主要な関心事の一つであり、通常それは無言で粛々と行われる。女性としての物心がつくと、強迫観念にとりつかれたように、ひたすら従事する日課である。「女としてのマナー」をわきまえていないと後ろ指をさされるのを恐れてか、それともつるつるした赤ん坊のような肌で魅了することをめざしてか、この20年であらゆる世代に浸透した習慣である（私が子供のころは、脛毛や腋毛のある女性は大勢いたし、むしろ処理をしないほうが普通だったと記憶している。女性の社会進出は進んでも、別の楔を自分の身体にうちこんでいるわけである）。これはロシアの片田舎でも共通するらしいが、しかし性愛に疎いレンカはまだこうした技巧も体毛への嫌悪を知らなかった。おかげで、リュプカは口にしたくないことを説明せざるを得ない状況に追い込まれてしまう（もっとも、ここできちんと性教育をレクチャーしておけば、後の災難は起きなかったのであろうが）。

しかしなぜ体毛が嫌悪されるのか、一度考えてよい問題である。体毛のないすべすべし



写真 10：ママエヴァの曾祖父が建てた家。レンカとリュプカも、このような家の前のベンチに腰掛けて、内緒話をしたのであろう。

た肌は、美しく魅惑的な身体、欲望される身体を象徴すると考えられる。その向こうには、美人のリュブカや、14歳のおませなアニカ・ミチキナ（レンカはユルカが好きではないかと邪推している）、テレビドラマの美女たちがいる。レンカが夢見る映画のような花嫁姿の自分もこの延長線上に位置づけられよう。体毛のあるレンカには、無縁の、手が届かない洗練された存在である。だからレンカは、バーニャに入って汗や垢、埃を洗い流しても、この境界を超えることはできず、無然とするのである。そこにやってきたリュブカは、体毛を剃るという、レンカには思いもよらなかった方法を提案する。男性にとって望ましい（と思われる）



写真 11：世界遺産キジー島。近隣から古民家が移築されている。立派すぎて、生活感はないが、かつての農村の雰囲気味わえる。

身体、欲望される（はずの）身体は、体毛を削ぎ落とさなければ、手が届かない。しかし、逆に言えば、削ぎ落としさえすれば、手が届くのだ（と思われる）！

それにしても、その過程のグロテスクなこと。カミソリで体毛を剃るというイメージ自体が美しいと言い難い光景である（どんな女性もこの作業を他人に公開したいとは思わないはずだ）。美しい身体を憧憬するレンカの欲望が、逆に、毛の生える身体という生々しい生理を前景化したわけだ。ここで象徴的な意味が与えられているのは、父親のヒゲソリを代用することだ。男性用カミソリのほうが、切れ味がよく、肌への負担も少ないのだが、ここで重要なのは、そういう実利的な面ではなく、男性用という点である。そう、レンカの体毛は、髭のような剛毛を削ぎ落とす道具をつかって、ようやく剃られるほど、力強く根を下ろしているのである。この過剰なるものは、どんなに削ぎ落とされても、根絶されることはない。2、3日もすれば、なおさら不快なちくちくした針となって再生するのである。だからレンカは、ユルカに会う前にはほとんど毎回、友人に教え込まれたとおり、剛毛を剃る儀式を人知れず実行したはずである。望みどおり、美しい身体を手に入れて、彼を魅惑するために。しかし彼女の生命力は、体毛と同じように、根絶やしにされることはない。犯されても、罵られても、暴れ牛に突き飛ばされても、決してめげない。しかも、どう考えても気の毒な災難なのに、滑稽なのである（このユーモラスな作風は、どうもゴーゴリが連想されて仕方がない）。そして、この未だ飼いならされていない過剰な生命力こそが、容姿にも知性にも恵まれないレンカの最大の魅力、ひいては小説の魅力なのだ。

4

今回は、32歳という若い作家を紹介した。デビュー当時は27歳。今後が本当に楽しみである。ママエヴァは、私とほぼ同世代ということもあり、気軽に話を聞き、しかも彼女のプライベートな領域を垣間見せてもらった。実に、朗らかで、アグレッシヴ、好奇心旺盛な女性であった。20代後半から30代前半というのは、日本では「ロストジェネレーション

ン」などと呼ばれる、不遇の世代である。他方ロシアでは、ソ連時代の記憶をもつ最後の世代であり、かつ多感な少年少女時代にペレストロイカを経験した。どん底を経験したせいか、この不景気にあっても明るく、希望に満ちているように思える（筆者が接した人々が偶然そうなのか、それとも日本での筆者の生活がよほど暗かったのかもしれないが）。彼女らの小説は、ソ連時代に言及されても、ソ連的な雰囲気は感じられない。その意味では、ノスタルジックにソ連時代を描くベストセラー作家（リュドミーラ・ウリツカヤやジーナ・ルービナ）とは明らかに作風も主人公のイメージも異なる。農村派の描く、ロシアという国の力強い源流である農村、そして近代化の過程で失われつつある古き良き農村のイメージとも異なる。ママエヴァが描くのは、ここではないどこかでもなく、失われた人々でもなく、我々のごく身近な世界であり、等身大の現代娘なのである。

それでは、最後にポドモゼロ村の自然をもう少し紹介して、今回の報告を終えたい。

写真 12: 小川で休むカモの親子。ソ連時代には、人家の戸をクチバシでたたいたり、人のズボンのすそにかみついて、エサを要求したという。ペレストロイカ後、困窮した人々が彼らを捕まえるようになり、警戒することを覚えた。

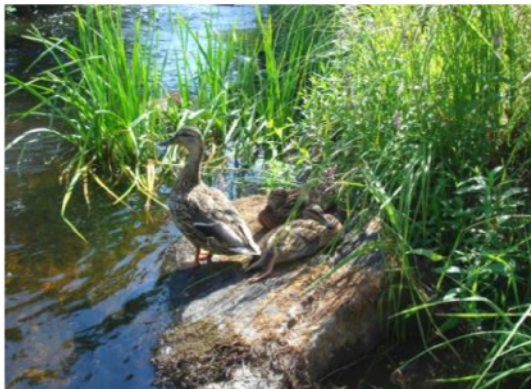


写真 13: 松林。下草は、野生の木いちご、野いちご、こけもも。



写真 14: 魚釣り。朝起きれば、庭のベリーを積み、昼寝をし、おなかがすいたら魚を釣り、小川や湖に水浴びに行く。気ままなダーチャ生活に見えるが、この日は不漁で、夕食の献立に悩む。翌日は、近所の人が新鮮な魚を分けてくれた。

(2010年8月23日)

※本報告は、日露青年交流センター

「2009年度若手研究者等フェローシップ」の助成による研究成果の一部である。